

風姿花伝第三、 問答条々 九 能に花を知る事

問。能に花を知る事、この

条々を見るに、無上第一な

り。肝要也。又々不審なり。

是何として得心べきや。

答。此道の奥儀を究むる所

なるべし。一大事とも、秘

〔口訳〕

問。今までの条々に説かれた所を見
ますと、能芸の道に於ては、花といふ
ものを知る事が、無上第一の要件であ
り、最も肝要なことであつて、しかも
十分に会得出来ないむづかしいもので
あると思ひますが、この花を如何にし
て心得たならば良いでありませうか。

答。その点こそ、この道の奥儀を究
める所といふべきであらう。一大事と
いふも秘事といふも、ただこの花を究

事とも、たゞ此一道なり。

先、大方、稽古、物真似

の条々に詳しく見えたり。

時分の花、声の花、幽玄の

花、かやうの条々は、人の

目にも見えたれども、その

態より出で来る花なれば、

咲く花の如くなれば、又や

がて散る時分あり。されば、

久からねば、天下に名望少

なし。たゞ、真の花は、咲

く道理も、散る道理も、人

のまゝなるべし。さては久

かるべし。この理を知らん

めるといふ一道に存する。まづ大体の

事は、年来稽古条々や物学条々の中

に詳しく示されて居る。即ち時分の

花、声の花、幽玄の花などに関するこ

とは、人の目にもよく見える花である

が、これはそのわざから生ずる花であ

るから、従つて又咲く花の如きもので

ある故、やがて散つてなくなる時期が

来る。即ち久しくつづく花でないから、

天下に名望を得るなどといふ事は先づ

望めないものである。ただ、真の花は、

咲く因由も散る因由も、其の人の心が

け次第できまるものである。それで、

久しく花を保つことが出来るわけである。この究極の道理を知るには如何したら良いか。或は別紙の口伝の中にそれが説かれて居るかとも思ふが、ただ、わづらはしいむづかしいものだと考へてはならない。即ち正道を踏んで怠らなければ、これは得られるものだ。

事、如何すべき。若別紙の
口伝にあるべきか。たゞ煩
はしくは心得まじき也。

先、七歳よりこのかた、年
来稽古の条々、物真似の
品々を、能々心中に当て、分
かち覚へて、能を尽くし、

工夫を極めて後、此花の失
せぬ所をば知るべし。此物
数を極むる心、則、花の種
なるべし。されば、花を知
らんと思はゞ、先種を知る
べし。花は心、種は態なる
べし。

先づ七歳以後、年来稽古の条々や物
学のしなじなを、十分に心中に分別し
覚え込み、芸能の稽古を尽くし、工夫
公案を究めて後に、この「花の失せぬ
所」を証得するやうにせよ。この、能
に於て各様の物真似を学び、稽古を尽
す心が、花の種であると思ふ。それで

花を証知しようと思ふならば、先づ花
をさかすべき種が何であるかをさとする
必要がある。「花は心・種はわざ」と
いふべきである。

古人云、

心地含^ムニ諸ノ種^ヲ、普雨悉^ク

皆萌^ス、頓^ニ悟^リニ花ノ情^ヲ已^{レバ}、

菩提ノ果自^ラ成^ズ。

凡^{おほ}そ、家を守^{まほ}り、芸を重^{おも}

んずるに依^よつて、亡父の申

置^をきし事どもを、心底に留^{とど}

めて、大概^{たいがい}を録^{ろく}す。所詮、

他人の才覚に及^{およ}ばさんとに

はあらず、たゞ、子孫の遅

疑^{のこ}を残^{のこ}すのみなり。

風姿花伝条々 以上

于時、応永七年^{庚辰}卯月十三日

左衛門大夫 秦 元清書

古人の言に、

*心地諸々の種を含む

あまね 普き雨に悉

く皆萌^{きよ}す

頓^{とん}に花の情^{こころ}を悟^{さと}り已^やれば

菩提の果

自づから成^なず

といふ語がある。

自分は、家を守り芸を重んずるによつて、亡父の遺訓を心底にとどめて、その大要を此処に記し置くものである。結局これは、他人の目にかけて他人の才覚にまで及ばさうといふつもりのものである。

ものではない。ただ子孫の庭訓となるべきものを後世に遺さんがために記したものである。

この段は問答条々の終結であり、又同時に、年来稽古条々・物学条々・問答条々の三つを含めての結尾の段である。そこで言はんと欲する所は「花の重大性」である。「能に花を知る事、この条々を見るに無上第一なり、肝要なり」といふ問者の言、「此道の奥儀をきわむる所なるべし、一大事とも秘事とも、ただこの一道なり」といふ答者の肯定、何れも如何に「花」が重大であり肝要であり無上第一であるかを力強く示して居る。花伝書一篇は、この花を伝へんが為に記されたものである。花、

を得るか得ないかは、一座の興廃は勿論、能楽全体の死活盛衰を決定するところのものである。一大事視せざるを得ない事情はここにある。「二大事」の語は禅よりの語である。「死ぬか活きるか」の場合に用ひられる語である。我々は軽々にこれを看過してはならない。生死の巖頭に立つた際の厳肅さを以て味ははねばならぬ。

かく重大な花といふものに対して、如何なるものが花であるか、その本質はどこにあるかとは、何人といへども知り究め度くなるのが人情である。「又々不審なり、是何として心得べきや」といふ質問が出るの

が当然である。これに対して世阿弥は、「先づ大方、稽古物まねの条々に精しく見えたり」といふ。それは今まで説いた所にくはしく説明してあると一喝を下した。そしてわ^ぎより出で来る花は必ず散り失せる、真の花は生涯散り失せないといふ事をくり返し述べ、真の花については、別紙口伝にあるかも知れないと幽かに匂はせた言ひぶりをしてゐる。かやうに鰻の香を嗅がされては、何人も別紙口伝一見の希望を起すに相違ない。しかし、世阿弥は決して直ちに秘事を明かさうとはしない。時期の到るを待つて居る。時期到れば、自悟自証出来るものであり、時期到らざれば、伝へても無益であるからである。彼は「先づ七歳

よりこのかた年来稽古の条々、物まねの品々を、よくよく心中にあてて分ち覚えて、能をつくし、工夫を極めて後、此の花の失せぬところをば知るべし」といふ。又実際、この正道を踏まなくては、花は得られないものなのである。

「この物数を究むる心、則ち花の種なるべし」。世阿弥は先づ花の種が如何なるものであるかをのべる。「花を知らんと思はば、先づ種を知るべし」といふ。そして、最後に、最も含蓄ある暗示として、「花は心、種は態^{わざ}なるべし」といふ一語を下した。大がいこれで悟れといふ気合で

ある。

最後の慧能大師の偈文の引用は、世阿弥の考察のしかたや、修行法に、禅の影響の多い事を物語る資料である。この方面については、「無所住と一行三昧」といふ小稿（国語教室、昭和十年五月号）で少しばかり論じておいた。

*心地含諸種——これは六祖壇經の中に説かれてゐる禅宗六祖慧能大師の偈である。その文を引用してみると、「若人具二三昧」（二三昧Ⅱ一相三昧と一行三昧）、如下地有二三種含藏、長養

成中熟其实上。一相一行亦如此。我今説法、猶如慈雨普潤大地、汝仏等性、譬諸種子、遇茲霑洽悉得發生。承我旨者決護菩提、依吾行者定証妙果。聽吾偈、曰。心、地、含、諸、種、一、普、雨、悉、皆、萌、頓、悟、華、情、已、菩、提、果、自、成。」とある。